

発 明 文 化 論

〈第 90 回〉

丸山 亮

藤田 嗣治 の 画 業

東京国立近代美術館の常設展示に、藤田嗣治の戦争画が何点か並んでいる。その異常な迫力が生む感銘は、画面を離れてもしばらく脳裏を去らない。

アッツ島玉砕を描いた巨大な画面。死体が累々と横たわるのを前に、なお敵味方が至近距離で向き合い、ピストルをかまえる相手を剣で突こうとする兵がいる。その兵のむき出した白い歯が生々しい。あるいは刃で敵兵のとどめを刺そうとする兵もいる。これらが全体に暗い褐色系の画面でまとめ上げられていて、戦場の酸鼻が肌に伝わってくるようだ。

サイパンの万歳クリフと呼ばれる崖から身投げする婦人や、その脇で死を前にした家族を描いた大きな一枚は、悲劇を呼び覚ます。さらにノモンハンの衝突を描く大作、哈爾哈（ハルハ）河畔の戦闘もある。これには陸軍の発注者が日本兵の死体に衝撃を受け、厭戦気分が広がることを懸念して描き直しを求めたという。展示されている作品は死んだ兵士を削除した別の絵だが、最初に描かれた方は今どこにあるのだろうか。

いずれにしても 20 世紀初頭のパリで女や猫を描いて洒脱な画風を確立し、エコール・ド・パリの寵児となった画家、藤田とはまったくちがう一面がここに見られる。その猫の絵も隣にならんでいて、戦う猫同士を何匹も円のように配し、繊細な描線で輪郭を描いているところは、アッツ島の兵士の歯の描き方に通じるものがある。藤田の描いた戦争画は、当時各地を巡回しながら、大変な数の観衆を集めたといわれる。

藤田のこうした絵が近代美術館に並ぶようになったのは、それほど昔のことではない。彼の戦争を描いた作品は戦後になって、戦争協力者として藤田を非難する声を生み、作品もずっと否定的な評価を受けてきた。藤田はその声に反発して日本を去り、フランスに帰化する。そしてキリスト教の洗礼を受け、レオナルド・フジタを名乗る画家として晩年を生きた。

以前フランスのシャンパーニュ地方を訪れた際、ランスの小さなチャペルに入る機会があった。このチャペルは壁面全体にフレスコ画のような絵が描かれていて、筆を執ったのがほかならぬ藤田だった。絵の中の民衆のうちに藤田の自画像があるのは、中世以来の宗教画の伝統に倣ったのだろうが、彼の信仰心を明かすものでもあろう。

ところで藤田の作品が、これほど戦前戦後で評価が分かれたのはなぜだろうか。藤田の父は陸軍軍医で、軍医総監にまで上り詰めた人物だった。また家系に軍関係者がいたこともあって、戦時は軍に協力を求められるようになったと思われる。陸軍美術協会理事長の地位にもついている。けれども藤田は若くしてフランスに渡ったように、連合国側に敵意を持つ好戦的な人物であるはずがなく、戦争画も喜んで描いたわけではなかった。しかし画家の本能というか、身に着けた技をふるう場面が与えられると、当然のこのように本領を発揮した。心ならずもであったかしの戦争画を描くことが、やがて精魂を傾けた仕事となり、結果として自信作が仕上がった。

戦争協力者のレッテルを張られた作家や画家が、戦後冷遇される話は藤田に限らない。小林秀雄も戦前の評論活動が戦争協力的だと非難されたことがある。このとき小林は、「利口な奴はたと反省するがいい。俺はバカだから反省などしない」と開き直った。藤田にそれだけの胆力があったならと惜しまれる。藤田が日本を去るとき残した言葉は「絵描きは絵だけ描いてください。仲間喧嘩をしないで下さい。日本画壇は早く国際水準に到達して下さい」だったという。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)